

タイトル:平成 27(2015)年度 研究セミナー(第 16 回)

日程:平成 27 年 12 月 18 日(金)~20 日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 マルチメディアセミナー室(306)

「私の博士論文」

坪井 祐司 (AA 研 研究機関研究員)

報告者が博士課程に入学したとき、博士論文について明確なイメージを抱けていたわけではなかった。英領期のマレーシア(マラヤ)の行政に関する修士論文を執筆して博士課程に入学後、マレーシアに留学することになったものの、現地で史料をみるという以上には関心が絞れていなかった。しかも、史料調査は必ずしも順調には運ばなかった。当時マレーシアの文書館の利用には調査ビザが必要で、その許可を得るのに数か月の時間を要したのである。このため、留学当初は実質的な研究活動はできなかった。

ただし、その期間に論文に向けての具体的な関心を定めることができた。それは、クアラルンプル近郊の村落で調査を行ったことがきっかけであった。その村落は、住民の多くはジャワからの移民二世・三世であり、ジャワ語を母語とする人も少なくなかった。しかし、彼らはアイデンティティとしても、行政上もマレー人であった。このような民族集団が形成される歴史的なプロセスを明らかにしたいと考えたのである。

そこで、文書館にて調査が可能になった段階で、地方行政史料の調査を行った。すると、植民地行政において、スマトラ、ジャワなど周辺地域からのさまざまな出自をもつ人びとがマレー語で植民地政庁へと手紙を送り、マレー人の行政官としての地位を得たことがわかった。マレーシアの多民族社会の一員であるマレー民族は、不均質な現地人のなかから植民地がもたらした行政や移民など、他者との相互作用を通じて形成されたのである。

帰国後、論理を再構成するとともに、その他の史料を加えることで、博士論文の執筆に取り掛かった。結果として、博士論文の執筆までには 7 年間を要したが、今から自らの博士課程を振り返ると、行き当たりばったりであり参考にするべき点は多くないのではないかとも思われる。ただ、留学先の現地での体験から問題意識を見直した点は、フィールドで課題を発見する行為であるとともに、自らの議論を組み立てるという意味でも自分にとって重要なことであったと感じる。